第二次スーパーロボット大戦Ｚ　破界編！～紅き修羅神を操りし戦士～

ジンオウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第二次スーパーロボット大戦Ｚ　破界編！～紅き修羅神を操りし戦士～

【Ｎコード】
Ｎ９７１７Ｔ

【作者名】
ジンオウガ

【あらすじ】
大時空震動により多くの世界が分裂、融合し、複数の多元世界が誕生した。そして、その２０年後。その多元世界で生活していたある少年は一機の修羅神との出会う……

プロローグ（前書き）

やっと書き直しが終わって、最初の話しです。見てくれるとありがたいです。

プロローグ

～とあるマンション～

???

「お～い！姉さん。いい加減起きないと遅刻するぞ～！」

俺の名は飛鷹フォルカ。熱海の学校に通っている高校生だ。何時も6時に起き、朝ご飯の用意をしながら俺の姉を起こすのが日課だ。

え？姉とは誰なんだって？それは……。

ガチャッ

葵

「ハイハイ、今起きたわよ。おはようフォルカ」

フォルカ

「おはよう姉さん。後ちょっとで出来上がるからテーブルに座っていてくれ」

そう、苗字でわかったと思うが俺の姉は最も過激なスポーツと言われているＦ０１のレーサーにして、ビルボードなどに活躍中であるトップモデルの飛鷹葵である。但し、本当の姉弟ではなく、俺はちょっと訳ありの弟である。

そんな訳で、今最後の目玉焼きを仕上げ皿に盛り付けた後、さっき作っておいた自分の目玉焼きの乗った皿を持ち姉さんのいるテーブルに運ぶ。

フォルカ

「はい、姉さんの分の目玉焼き。味付けはお好みでどうぞ」

葵

「ん、ありがとう」

持っていた皿を姉さんの方に置き、俺も自分の椅子に座り朝ご飯を食べ始める。

フォルカ

「あ、姉さん。今日の帰りはくろがね屋のバイトで遅くなるかもしんないから」

葵

「またぁ？この前もそんな事言ってなかったかしら？」

俺がそう言うと、姉さんはなんかいやそうな顔をする。

フォルカ

「仕方ないだろ。今日は稼ぎ時らしいんだから、心配しなくても早めに帰るようにするから」

葵

「むぅ……早めに帰って来なさいよ？」

フォルカ

「まぁ、早めに帰れるよう努力するよ υ」

実は、姉さんはとんでもないぐらいのシスコンでなんでもフォルカ分を取らないとやっていけないらしい。ってかなんなんだそのフォルカ分って？ υ俺からどんな成分が取れるんだ？ υ

フォルカ
「っと、そろそろ行かないと遅刻しちゃうな。それじゃ行ってくるから姉さんもちゃんと仕事遅刻しない程度にしてよ」

葵
「はいはい、わかっているわよ。それじゃ……行ってらっしゃい」

フォルカ
「ああ。行ってきます」

そう姉さんに言って、俺は鞄を持ちマンションを出て、外のバイク小屋に停めているバイクにまたがり熱海に向かった。だが、この時はまだ気付いていなかった。これから俺と姉さんの運命を大きく変える出会いがある事に……

プロローグ（後書き）

次回、紅き修羅神の目覚め。お楽しみに！

第1話：紅き修羅神の目覚め（前書き）

またせてすいません。なんとか、書けましたので見てください！では、どうぞ！

第1話：紅き修羅神の目覚め

～熱海宿屋『くろがね屋』～

あの後、学校が終わり俺は山奥にある宿屋であるくろがね屋でバイトをしていた。

フォルカ
「女将さーん！このお酒はどこの部屋に運べば良いですか？」

つばさ
「ああ。それは奥の間に運んでおきな！」

さっきの返事をした人はこの温泉宿屋『くろがね屋』の女将である綿織つばささんだ。このくろがね屋にはつばささんの他にくろがね五人衆と呼ばれる人達がいる。湯殿係の安さん、番頭のクロスさん、本名は分からないけど包丁さばきは天下一品の板前の先生、送迎係のジャンゴさん、そして仲居頭を務める菊ノ助さんの五人だ。この人達には此処でバイトを始めてから色々お世話になっているのだ。

つばさ
「ああ。フォルカ、それを運び終えたらもう上がっていいから」

フォルカ
「え？もう良いんですか？」

俺は突然のことに驚いた。

つばさ

「ああ。今日は確かに稼ぎ時なんだが、ちょっと用事が出来てね。だから今日は早めに帰って自分の姉を安定させな」

フォルカ
「あ……はい！分かりました！」

俺はそう女将さんに言って酒を運び始めた。

◇

～第三者視点～

フォルカが酒を運び終え、帰った後、つばさは自分の部屋にいた。

つばさ
「……クロス」

クロス
「へい…最後のお客さんには安が行きました。これで準備は終わりです」

つばさが近くにいたクロスの呼ぶと、クロスはそう言った。

つばさ
「まったく…稼ぎ時だってのに野暮な連中が動き出したもんだよ」

クロス
「先生もついております。心配は要らないと思いますが…」

つばさ
「連中を甘く見るんじゃないよ。きっと奴が来るよ……フフ…まずはこの熱海でお手並み拝見といこうかね……」
つばさはそう言うと、外の月を見ていた。

◇

俺は仕事を終え、バイクを押しながら歩いていた。

フォルカ
「それにしても、今日の女将さんの様子が変だったな。なんかこぉ……何かが起きるみたいなことを知っていたような感じをしていたけど……」

俺がそう思いながら歩いていると、空き地に見覚えのある姿を見えた。

フォルカ
「ん？あれは……甲児か？一体何やっているんだ？」

そこには、同じクラスで親友の兜甲児がいた。だが、なんか厄介事に巻き込まれている最中で、しかも確か甲児の前にいるのは隣町の番長で確か……ボスって名前の奴とその取り巻きが二人ほどいた。

フォルカ
「……仕方ない。助けるか……いくら何でもあれは卑怯だ」

俺はそう言ってバイクをその場に止め、取り巻き達に気づかれないように近ずく。

ボス
「さぁて…大人しく勝負して俺に……」

フォルカ
「征服しろ……てか？」

ズカァッ！！

ボス
「ぐぁ！！」

俺はすぐさまボスの懐に飛び込み、跳び蹴りを喰らわせる。

甲児
「フォルカ！？どうしてお前がここに！？」

フォルカ
「やぁこんばんは甲児。なんか見てられなかったから助太刀するよ」

ボス
「テ、テメェ！誰だ！？」

起き上がったボスは俺見てそう言った。

フォルカ
「俺か？俺は飛鷹フォルカ。ここにいる兜甲児の親友だ」

俺は拳を構えながらそう告げる。

ボス
「飛鷹フォルカだぁ？そいつが一体何の用だ！」

フォルカ
「いや、お前達の卑怯っぶりに見かねてな。悪いけど、怠慢はらせてもらうぜ！」

俺はそう言って、ボスに向かって走り出す。

ボス
「ふざけやがって！これでも喰らえ！」

ボスは俺に向かって拳をふるってくるが、俺はジャンプしてボスの後ろに着く。

ボス
「んなっ！？」

フォルカ
「ふん！」

ドカッ！

ボス
「ぐふぅ！？」

そして、そのままボスに裏拳をかましてぶっ飛ばしボスを踏みつけ

る。

ムチャ
「ボス！」

フォルカ
「動くな！コイツにトドメを打たれたくなければ大人しくシローを離してもらおうか？」

ボス
「こ、コイツ、強い……！」

俺はそう言った瞬間！

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

突然地震が起きた。

甲児
「な、なんだ！この地震は！？」

シロー
「あ、兄貴達！あれ！」

フォルカ&甲児
「「ッ！！」」

俺と甲児はシローの指指す方を向くと、そこに人間の形をしたロボットが四機いた。

甲児
「何だ、あれは！？」

シロー
「兄貴！こっちに来るよ！」

シローの言うとうり、一機のロボットがこっちに向かっていた。

甲児
「逃げるぞ、シロー！フォルカ！」

フォルカ
「わかった！それからボスだったな、次にこんなことしたら……只じゃおかないから覚悟しろよ？」

ボス
「へ、へい！」

そうボスに言って、俺は甲児達とは別方向に逃げる。もちろん、自分のバイクはちゃんと持っていくが。

フォルカ
「じゃあ俺はこっちから逃げるから、甲児達も気をつけろよ！」

甲児
「フォルカこそ、気をつけろよ！」

そうして俺は、甲児達と別れた。
そうして、別れた俺はあのロボットから見える所にいた。

フォルカ
「ここなら大丈夫そうだが、甲児達は大丈夫だろうか……ん？なんだろ？あの赤い戦闘機は？」

俺が様子を見ていると突然甲児達の家から赤い戦闘機みたいな物が出てきて、街に降り立った後、また飛び立ち、移動し始め、それに近ずこうとしたら今度は女性型のロボットがその戦闘機を守るように現れた。

フォルカ
「あのロボットって確かテレビに移っていた奴だ！」

すると、その他に銀色のロボットも現れ、ある程度戦っていると、今度はその戦闘機が甲児達の家の研究所にいき、そしてそこから現れた黒鉄のロボットが現れ、戦闘機がそのロボットと合体して、近ずたロボットをロケットパンチで一撃で破壊した。

フォルカ
「凄い……あのロボットを一撃で……」

俺はあの黒金のロボットに驚いていると、いきなり体の左右が男と女に別れたような人物が現れ、黒金のロボットを素手でぶっ倒した。

フォルカ
「嘘だろ！？あの男女、素手であのロボットを倒した！？」

キィィィンッ！

フォルカ
「うっ！頭が……ッ！」

俺は驚きながら言った瞬間、突然頭が痛くなりその場に座り込む。

フォルカ
「（何なんだ、この痛みは…！何かが…俺を…呼んで……いる？）」

俺は何かに導き出されるように、森の奥に進むとそこには光があり、それを見ると、髪のある全身が赤いロボットが膝立ちで佇んでいた。

フォルカ
「お前が……俺を呼んだ……のか？」

そう言いながら俺はその赤いロボットに触れた瞬間、頭の中にこいつの名前、操縦方法、更にある流派の事が流れ込んできた。

フォルカ
「ッ！そうか……お前の名前は『ヤルダバオト』。そして、その使う流派は『機神拳』……なんだな」

俺がそう言うと、ヤルダバオトはそうだと言っているかのように見えた。俺はすぐにコックピットに乗り、そしてヤルダバオトを起動させる。

フォルカ
「なるほど、この機体は俺の動きをそのままダイレクトに伝えられるんだな……よし！行くぞヤルダバオト！」

俺の掛け声と共に、ヤルダバオトは動きさっきの黒金のロボット達が戦っている所までそのままジャンプし、ちょうど真ん中辺りに着地する。

あしゅら男爵
「な、なんだ！あのロボットは！だが、いくら現れようともこの機械獣ダブラスＭ２で一捻りしてやるわ！行けぃ！ダブラスＭ２！」
男女がそう言うとダブラスＭ２と言われた頭が２つあるロボットがこっちに向かってビームを撃ってくるが、俺はそれをヤルダバオトの片手で弾く。
あしゅら男爵
「な、何ぃ！？」
さやか
「う、嘘でしょ！？」
クロウ
「ビームを片手で！？」
甲児
「弾いた！？」
片手で弾いたことに驚いた声が聞こえてかたって！今の黒金のロボットから聞こえたのって甲児じゃん！？まさか、甲児が操縦していたなんて、だけど今ここで俺が乗っていることをバラす訳にはいかない。
フォルカ
「その程度か……ならば、今度はこちらの番だ！」
俺はそう言って、一歩後ろにヤルダバオトの右足を下げ、そして一

気にダブラスＭ２の後ろに回る。

あしゅら男爵
「は、早い！？」

フォルカ
「ふんっ！」

ドカァ！

後ろに回った俺はまずは、ダブラスＭ２に裏拳を打ち込む。

フォルカ
「うおぉぉぉぉぉ！！」

ズガガガガガガッ！！

更に、ダブラスＭ２に見えない速度で蹴りを打ち込み上に上げる。

フォルカ
「でりゃ！！」

ドカァァンッ！！

最後に、落ちてきたダブラスＭ２をストレートパンチで吹き飛ばすと、ダブラスＭ２は空中で爆発した。これが、このヤルダバオトの基本的攻撃であり、頭の中に流れてきた流派『機神拳』である。

あしゅら男爵
「馬鹿な！Ｄｒ．ヘルよりお預かりしたダブラスＭ２が一撃でだと

！」

近くで見ていた男女はダブラスＭ２が一撃で破壊された事に動揺を書くしきれていなかった。

あしゅら男爵

「な、何なのだ！あの髪付きのロボットは…！ええい、ここはひとまず撤退だ！」

そう言って、男女は部下と共に逃げていった。俺は奴らが逃げていったのを見た後、そのままこの空域から離脱して、そのままバイクを停めてある所まで行き、自分の家に帰った。ちなみに、ヤルダバオトは何故か知らないけど、俺が降りた瞬間にどこかに消えていた。だが、俺には分かっていた。ヤルダバオトは俺が呼べばまた現れると……。

あの後、家に帰り着いたら姉さんが泣きながら俺に抱き付いて来て、熱海の事をテレビで見ていて俺が無事か心配していた。そして、落ち着かせるのにかなり時間がかかったυ

第1話：紅き修羅神の目覚め（後書き）

次回、やってきた災厄。お楽しみに！

第2話：やってきた災厄（前書き）

遅れてすいません！やっと書けたので見てください！ではどうぞ！

第2話：やってきた災厄

熱海での出来事から1日が過ぎた翌日、俺は何時もどうりに姉さんを起こし、朝ご飯を食った後、俺は東京の21世紀警備保障に来ていた。その訳は今日、21世紀警備保障のセキュリティーショーが行われる為だ。まぁ本当はここにある21世紀警備保障の所有するロボット『ダイ・ガード』を見るためだけどね。

大山

『皆様、こちらが21世紀警備保障の誇るダイ・ガードでございます。ダイ・ガードは全高20m、重量156t。対ヘテロダインを目的として、安全保障軍によって建造されました。現在では我が21世紀警備保障が運用を担当しております』

そう言って、説明係員の人の立っている後ろにある赤と黒のロボットがダイ・ガードである。ちなみに、ヘテロダインとは界震により現れる謎の生命体である。詳しい事は知らないけれど、なんでも次元震みたいに世界の壁が揺れた時にヘテロダインは現れるらしい。ん？なんか社員が子供となんか話しているな。まぁあっちの問題だからあまり関わらない方が良いな。俺はそう思い販売をしている所を見て回っていると、熱海の時の感覚が頭によぎってきた。ただし、あの時の頭の痛みはなかった。

フォルカ

「この感覚は……海の方から…！」

俺はそう思い、海の方を見るとヒトデのような化け物『ヘテロダイン』がこっちに向かっていた。

フォルカ
「ヘテロダイン！？まさか本当に現れたのかよ！」
俺は人目のつかない場所まで移動しながらそう言った。このままだとヘテロダインが街を襲うかも知れないからな。そうして移動していると会場にあったダイ・ガードが動きだした。

フォルカ
「ダイ・ガードが動いた！？だけど、確か今のダイ・ガードって装甲がトタン並みの強度しかなかった筈……！」
そう、今のダイ・ガードの装甲はイベント用の運びやすさの為にトタン並みしか強度はなかった筈だ。そして、ダイ・ガードが逃げ遅れた人達を逃がし、そのままヘテロダインに向かって行き体当たりを喰らわすが、逆にヘテロダインの触覚の攻撃を喰らい、吹っ飛ばされる。しかも、ダイ・ガードの装甲が触覚の一撃で既に凹んでいた。

フォルカ
「やっぱり…！このままだと先にダイ・ガードの方がやられる！」
俺は人気の無い所まで着き、そして、自分の相棒を叫んだ。

フォルカ
「来い！ヤルダバオトォォォォォ！！」
すると、俺の呼びかけに応えるようにヤルダバオトが現れ、俺はすぐさま乗り込み、ダイ・ガードの前までジャンプをして守るように立つ。

赤木
『コイツは！』

青山
『熱海に現れた謎の髪のあるロボット！？』

いぶき
『まさか、ここに現れるなんて…！』

多分、ダイ・ガードのパイロットらしき人達の声が聞こえてくるが、とりあえず、黙っている事にして、ヘテロダインの方に集中する。

フォルカ
「さぁ来いヘテロダイン！お前の相手はこの俺だ！」

すると、ヘテロダインはヤルダバオトに触覚を伸ばしてきたが……

フォルカ
「あまい！」

俺はそれを掴み、ヘテロダインをぶん投げて、俺はヤルダバオトの両手に覇気の溜めて、そして、ヘテロダインに向けその覇気を放つ。

フォルカ
「喰らえ！機神双獣撃！！」

放たれた覇気は小さな竜のようになり、そしてヘテロダインに当りその体を貫き通し、ヘテロダインは砂のようになり、消えていった。これこそ、自分の覇気を弾丸のように放つ技『機神双獣撃』だ。なんで、この技を知っているかは分からないが。

いぶき
『す、すごい……』

青山
『あのヘテロダインを……』

赤木
『一撃で倒した……』

ダイ・ガードの人達はヤルダバオトの強さに驚いていたが、俺はまたあのヘテロダインが来たような感覚がよぎった。

フォルカ
「この感覚……熱海の時の……まさか！？」

俺はすぐに東京湾の方を向くと、熱海に現れた頭にカマが付いたロボットとその騎兵のロボット数機が現れた。

赤木
『あいつら！昨日、熱海に出た奴か！』

あしゅら
「ロボットが現れたと聞いたが、マジンガーZではないがあの時の髪付きのロボットがいたとはな！ここで始末してくれる！」

青山
『どうするんだ、赤木！奴等、こっちに仕掛けてくる気だぞ！』

赤木
『どうするって言ったって…やるしかないだろうが！』

どうやらダイガードはやるみたいだな。だったら、俺もやるしかない！

いぶき
『待って！まだ何か来る！』

サブパイロットの人がそう言うと、ダイガードのすぐ目の前に謎のロボットが現れた。

赤木
『あれって！？』

青山
『ニュースで見たぞざ！ダンクーガとかいう奴か！』

いぶき
『あのロボットって、負けてる方の味方をするのよね』

青山
『じゃあ、この場合……』

赤木
『俺達の味方をしてくれるって事か…？』

ダンクーガ。正体不明の謎のロボット。あのロボットが現れるのは、負けている方の味方だ。まさかこんな所に現れるとは驚いたが、こっちにはラッキーな事だ。

フォルカ

「よし！行くぞ！」

俺はそう言って、奴等に向かって走り出し、まず一体目を回し蹴りで破壊する。

フォルカ

「さらに、機神双獣撃！」

追加攻撃で近くにいた騎兵のロボットの一機に機神双獣撃を喰らわせ更に一体破壊する。

あしゅら

「ええい！なぜこうも簡単に機械獣が次々と破壊されるのだ！」

男女がそう言っているが、無人機は大体の行動パターンをプログラムで動いているので、有人機とは全く違う。そのため、少しでもパターンさえ分かれば対処出来る。すると向こうからあの時の甲児の乗っていた黒金のロボとアフロダイＡと黒と銀のロボが現れた。

青山

『今度は何だ！？』

赤木

『あの黒いロボット、熱海で髪付きのロボットと一緒に奴らと戦った奴だ！』

いぶき

『じゃあ、味方なのね！』

フォルカ

「やっぱり来たんだな。甲児……」

どういう事情かは分からないけど、これは助かる。そうして、甲児達のロボのおかげで騎士型のロボットを全部倒し、最後のガラダK7は甲児のロボット『マジンガーZ』の胸から発射された『ブレストファイヤー』と呼ばれる光線？により破壊され、男女は悔しい顔をして逃げて言った。

フォルカ

「さてと、軍が来る前にさっさと退散しますか」

俺はそう言って、甲児達に気づかれない内に逃げた。

第2話：やってきた災厄（後書き）

次回、超獣合身。お楽しみに！

番外編『葵ちゃんの憂鬱その1』（前書き）

思い付きでハルヒちゃんの憂鬱風に作ってみました。短いですが見て下さい。

番外編『葵ちゃんの憂鬱その1』

『宣伝』

葵
「私は飛鷹葵！ただの人間には興味ありません！この中で葵ちゃんファンがいたらこの小説を読みなさい！！以上！！」

『……ᴗ』

朔哉&フォルカ
（（いきなり何か叫んだ！？））

葵
「と言う訳で、宣伝と自己紹介を同時にこなしてみたわ！」

朔哉
「宣伝て何だ！？俺には空に向かって一人で叫んでる様にしか見えなかったぞ！？」

葵
「よしっ！それじゃ次はみんなの紹介をするわっ！！」

朔哉&フォルカ
「「やめーい！！」」

二人は全力で阻止した。

『チームD紹介』

館華くらら
チームDのノヴァライガー担当。

ジョニー・バーネット。
チームDのノヴァエレファント担当。

飛鷹フォルカ。
葵の義理の弟にしてチームDの特殊機体『ヤルダバオト』のパイロット。そして、葵はフォルカを弱愛している。

加門朔哉。
チームDの軸足ノヴァライノスの担当。以上。

朔哉
「俺だけあんまり活躍ないけどな（┣◇┫）！！」

※補足。ツッコミ担当。

番外編『葵ちゃんの憂鬱その1』（後書き）

この番外編はちょくちょく書いていきます。

第三話：超獣合神！（前書き）

葵
「さぁ始まるザマスよ！」

くらら
「い、いくでがんス／／」

ジョニー
「フンガー」

朔哉&フォルカ
「「まともに始めろよ！！」」

はい、では始まります！

第三話：超獣合神！

フォルカ
「え？姉さんいないんですか？」

監督
「ああ、そうなんだ。俺が見に行った時には葵の奴、どっか行ってしまったらしい」

フォルカ
「そうですか。分かりました。もしかしたら姉さん、家に帰っているかもしれませんので俺はこれで」

監督
「すまないな。せっかく迎えに来てくれたのに……もし葵が戻ってきたら言っておくよ」

フォルカ
「はい。それじゃあお疲れ様です」

そう言って、コテージを後にした。今日はレースのグランプリがあり、そして終わったらしいので迎えに来たのだが、どういう訳か姉さんがいなくなってしまったらしいので帰っているところだ。

フォルカ
「それにしても、姉さんどこに行ったんだろう？今日は優勝祝いに腕によりをもって姉さんの好きな物作ろうと思ったのになぁ」

そう言いながら、歩を進めているとまた頭に何かが現れた感覚がし

た。

フォルカ

「この感覚……向こうからだ……よしっ」

そう言って俺は人気の無い場所に行き、ヤルダバオトを呼び、乗り込み感覚のあった所に向かった。

◇

～ドラゴンズハイヴ　司令室～

ルゥ

「…新たなパイロット候補４名、全て転送完了しました」

田中司令

「ご苦労様です。無人転送機の回収、よろしくお願いします」

ルゥ

「了解しました」

田中司令がそう言うと報告したルゥが後ろに連れてきた葵達は戸惑っていた。

葵

「…いったい何なのよ、ここ…？あたし…グランプリの後、一度自分の部屋に戻った筈なのに…」

くらら
「どうなってるの…？ここは奴等のアジトじゃない…？」

朔哉
「んぁ？まだ俺…寝ぼけてんのか…。ここ、何処だよ…？」

ジョニー
「とりあえず、僕がいた筈の移動中のタクシーの中ではありませんね」

ルゥ
「皆様、お加減はよろしいようですね。私…ルゥ・リルリと申します。どうぞ、よろしくお願いします」

田中司令の隣にいた少女ルゥ・リルリはそう言って４人に自己紹介をした。

葵
「ルリルリ？」

ルゥ
「ルゥ・リルリです！」

葵
「はいはい。ルリルリでもリルリルでもいいけど、いったいあなたは何者なわけ？」

田中司令
「それは私からお話ししましょう」

葵の質問にルゥに変わって田中司令が応える。

朔哉
「何だよ、あんた？」

田中司令
「ああ、どうも。私、ここの司令官やっとります田中です。あなた方４人をお待ちしておりました。Ｆ０１のチャンピオンレーサーにして、トップモデルの飛鷹葵さん。麻薬調査官、館華くららさん。有名広告代理店の若きエリート、ジョニー・バーネットさん。そして、ホームレスの加門朔哉さん。ようこそ、ドラゴンズハイヴへ！」

葵
「ドラゴンズハイヴ？いったい、ここ何なのよ？」

葵は田中司令の言葉に疑問になる。

ルゥ
「ここは太平洋に浮かぶ小さな島で名前は龍牙島…。龍の牙の島で龍牙島です」

ジョニー
「聞いた事のない名前ですね」

ルゥ
「そうですね。一般的にはあまり知られていないはずです。２０年前の大時空震動で誕生した火山島の一つなんです」

くらら
「どう見ても、私達…本人の意思とは無関係にここに集められたよ

うだけど…」

無理矢理連れてこられた事にくららは少し頭にきていた。

田中司令
「申し訳ありませんね。いささか乱暴な手を使ってしまって」

くらら
「これは誘拐と見ていいわね。あなた達を拘束します…！」

田中司令
「ちょっとお待ちを。まずはこちらの話を聞いていただきたいのですが…」

田中司令はそう言ってくららを落ち着かせる。

くらら
「では、まずは私達をさらった目的を言いなさい」

田中司令
「分かりました。皆さんに来ていただいた理由を単刀直入に申し上げます。我々はあなた方４人と契約を結びたいのです。ダンクーガノヴァのパイロットとして」

葵
「ダンクーガノヴァ…？」

くらら
「ダンクーガって、まさか、あの……」

朔哉
「謎のスーパーロボット…」

ジョニー
「世界中の紛争地域に突如現れては不利な方に味方し、圧倒的な戦力で戦いを終わらせる超兵器…超大国の秘密兵器説、超古代文明の遺産、異星人のスーパーテクノロジーと色々な噂が流れているけど、確かな事は全くわからない」

葵
「要するに何もわかってないのね」

ジョニー
「……そういう事です」

葵
「わかるように説明してくれない？」

葵が田中司令にそう言った。

田中司令
「その前に一つ。ダンクーガというのは略称でありまして、本当の名前はダンクーガノヴァになります。今後はダンクーガノヴァという名を使わせていただきます」

くらら
「ダンクーガノヴァ…」

田中司令
「簡単に説明しますと、ダンクーガノヴァには４人のパイロットが

必要でして、その４人は定期的に入れ替えが行われます。そして、前任の契約終了に伴いまして新しいパイロット達との契約が必要になったわけで…厳密な調査の結果、選ばせていただいたのがあなた方４人というわけです」

田中司令の言葉に葵は反発した。

葵

「ちょっと待って。それって、あなた達が勝手に選んだって事？」

田中司令

「そういう事になりますね」

葵

「勝手に選んで連れてきて、この上、訳のわかんないロボットのパイロットになれって言ってるの？」

田中司令

「簡単に言うとそうなります。ハイ！」

その言葉に葵はキレた。

葵

「冗談じゃないわ、お断りよ！オファーするんなら、エージェントを通して！ていうか、あの子とのスキンシップの一時を減らす気なの！？」

田中司令

「（あの子？ υ）それが何分我々ドラゴンズハイヴは秘密組織でして、公式なオファーは出来ないんですよ。ですから苦労してこうい

う方法をとっているわけでして…あ…！まぁ、その分、報酬などで頑張らせていただいてまして！金額は…そうですねぇ。葵さんの昨年の総収入にゼロが一つつく位です。さらに様々なオプションも用意しています。残念ながら現在のお仕事の方はお休みしていただく形になりますが…ですが、それ以外の点につきましては様々な形でサポート出来る態勢を取っております。あなた方は必要な時にダンクーガノヴァに乗っていただくだけ…ただし、いかなる場合でもダンクーガノヴァに関する機密事項は秘密にする事。こちらの条件はこれだけです」

くららら
「…こういう冗談は好きじゃないの…！手が込みすぎて笑えないわ」

田中司令
「やだな～。冗談でこんな事、出来ませんよ～。本当の事ですから」

くららら
「こんな馬鹿な話を信じろというの？」

田中司令
「まぁ私の立場としてはそうお願いするしかないんですがね」

くららら
「帰らせてもらうわ。私、暇じゃないの」

くららがそう言っていると司令室に作業服をきた女性が入ってきた。

セイミー
「田中さん、彼等が動き出したわよ」

田中司令
「グッドタイミングですねぇ。丁度、手頃なミッションが発生しました」

ジョニー
「彼等？ミッション？」

田中司令
「セイミーさん…発進準備、よろしいですか？」

セイミー
「準備は出来てるけど、まだパイロットが…」

田中司令に言われたセイミーが困ったように言う。

田中司令
「それがですね。こちらが新しいパイロット候補の皆さんなんですよ」

セイミー
「あれ？この人達が新人さん？今回はビジュアル重視って感じなのかしら？私、整備主任にセイミー。これから、ダンクーガノヴァをよろしく」

朔哉
「って言われてもなぁ…」

田中司令
「まぁ百聞は一見に如かずと言いますし、とりあえず一度ダンクーガノヴァを体験してみて下さい。では、発進準備を。気をつけて下

さいね、床が開きますから」

田中司令がそう言うと葵達のいた床が光出し、４人は何処かに転送された。

葵

「きゃあっ！！」

田中司令

「契約については皆さんが戻られてからという事で…あ…ダンクーガノヴァの操縦方法は皆さんをお呼びする数日前に睡眠時にインプットさせていただいています。ですので、まあ…気軽に楽しんできて下さい」

???

『首尾は？』

田中司令

「ダンクーガノヴァ、新鋭パイロットで発進します」

???

『ああ、彼等の健闘に期待しよう』

田中司令

「例の組織との接触はいかがです？」

???

『コンタクトは終了している。このミッションの終了後に会談の場が持てよう』

◇

〜フォルカ視点〜

あれから数時間移動して、感覚のあった所に着くとそこには人革連の基地を襲っているテロリストたちがいた。

フォルカ
「あの感覚はこれだったのか……だけど、これ以上はやらせない！」

そう言って俺は基地を守る形でテロリストたちの前に立つ。

テロリストA
「あれは…髪付きのロボット！！」

テロリストB
「なぜコイツが此処に！？」

テロリストC
「構うものか！邪魔者は排除だ！！」

そう言ってテロリストたちは武器を構えてきた。すると、こちらに向かってくる機影が5機現れた。

テロリストA
「あれは…ガンダム！ソレスタルビーイングか！！」

フォルカ

「あれがソレスタルビーイングか……ってあれ？あの黒と銀のロボット、確か甲児と一緒にいたロボット……なんでソレスタルビーイングと一緒にいるんだ？」

俺は疑問に思いながら、とりあえず目の前の敵に集中することにした。ソレスタルビーイングも多分一緒の目的みたいだし。

フォルカ

「……？何だろ？なんか感じたことのある感覚だけど……」

そう思い、感じた方に目を向けて見るとそこには四機のマシンが現れた。

フォルカ

「あの四機のマシンってダンクーガのパーツなのか？」

そう言っているとテロリストたちが攻撃してきて、ソレスタルビーイングとダンクーガのマシン四機は行動を開始し始めた。

フォルカ

「っと！とにかくテロリストたちをなんとかしないと！」

俺はそう言って、最初に近くにいたテロリストの機体に近く。

テロリストA

「なっ！早い！？」

フォルカ

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

最低限にコックピットを狙わないように、機体を戦闘不能にしていく。

フォルカ
「っ！！何か来る！テロリストたちの増援か！」

そう感じた瞬間、二体の陸戦型ジェノサイドロンが現れ、そして、さっき戦っていたマシン四機も合体しダンクーガへとなり、ダンクーガが取り出した剣で一機を切り裂いて破壊した。だが、もう一機のジェノサイドロンがダンクーガに襲いかかる。その時、あの感じた感覚が分かった。

フォルカ
「！！まさか、あれに乗っているのは……やらせるかァァァァ！！」

俺がそう叫ぶと、ヤルダバオトはそれに応えるように、動き、一瞬にしてジェノサイドロンに近づいて振り上げたアームを掴み、そのまま投げ飛ばす。

フォルカ
「その隙は逃さん！行くぞ！ヤルダバオト！！」

そう言って、ジェノサイドロンに近づいて殴る蹴るの連続ラッシュを喰らわせ、次にジェノサイドロンを上に打ち上げ、最後にジェノサイドロンに向かって飛び蹴りの応用で蹴る。

フォルカ
「奥義！機神猛撃拳！！」

そして、ジェノサイドロンが爆発したのを見た瞬間、いきなりもの

凄い脱力感を感じた。

フォルカ
「はぁ……はぁ……だ、大丈夫だった…姉さん？」

葵
『その声は……フォルカ！？なんであなたがそのロボットに！？』

フォルカ
「ご……ごめん姉さん……その話は……お…き……」

そう言い切る前に、俺は意識を失った。

第三話：超獣合神！（後書き）

次回、戦闘後の説明。お楽しみに！

番外編ＥＸ１：ブラコンは何しでかすか分かったもんじゃない。前編（前書き）

とりあえず、まだ完成していませんのでこの番外編を見てください！ちなみにこのでは結構葵のブラコンが炸裂します。

番外編EX1：ブラコンは何しでかすか分かったもんじゃない。前編

此処は、竜牙島のドラゴンズハイヴのとある部屋。そこにはこの作品の超ブラコンでメインヒロインでもあるダンクーガノヴァのパイロットの飛鷹葵と同じくダンクーガノヴァのパイロットのジョニー・バーネットと加門朔哉、そんでもってソレスタルビーイングのガンダムマイスターのロックオン・ストラトスがいた。

葵
「あなた達を呼んだのは他でもないわ…奴がついに動く……」

朔哉
「…葵、それは確かなのか？」

葵
「間違いないわ、奴の周りには常に私の仲間（女性メンバー）が張っている。奴もそれに感づいて目立った行動を控えていたけど、とうとう我慢できずに動き出したわ」

葵はそう言ってコップに入っていた水を飲み干し、コップをテーブルに置く。

葵
「私はもう後手に回る気はないわ。他のみんながガタガタ言うなら腹をくくるわ……決戦よ。奴も奴の企ても全部潰す」

ロックオン
「…そうか、葵がそのつもりなら俺らの命、アンタに預けるぜ」

葵
「ふふ…頼りにしているわ」
そう言って葵は部屋を出て行き、出て行った後、朔哉とロックオンはジョニーに言う。
朔哉&ロックオン
「「……ジョニー…一つ確認してもいいか？」」
ジョニー
「なんですか2人共？」
朔哉&ロックオン
「「……奴って……誰？」」
ジョニー
「知らないんですか！！」
番外編ＥＸ１『ブラコンは何しでかすか分かったもんじゃない』前編
～とある超人気な遊園地～
今日の朝、俺は何時ものように朝飯を食った後、人気のある遊園地である人を待っていた。
くらら
「ごめんなさい、待ったかしら？」

フォルカ
「いえ、今来たところですよくららさん」
そう、俺が待っていたのは同じチームDのメンバーの館花くららさんである。
くららら
「ごめんね？ちょっと支度に手間取ってしまって…」
フォルカ
「気にしていませんよ。今日は楽しくデートと洒落込もうじゃないですか」
くららら
「ふふ、そうね。それじゃ、行きましょうか♪」
フォルカ
「はい、分かりました♪」
そう言って、俺はくららと隣り合わせで歩き入場チケットを買いに行く。でも何でか見られているような気がするが、何だろうか？
◇
〜第三者視点〜
そんなフォルカ達の様子を草原から見ている者達がいた。

葵
「…ふざけるんじゃないわよ。フォルカはねぇ、あなたが来る前の一時間前にはいたのよ。本当だったらそのポジションは私のだったのよ？こうなったら残りの人生は全てその命で償いなさい。ちょっと朔哉！あなたちょっと土台になりなさい」

そう言って葵はグラサンを掛け、どっからか出したのか分からないがアサルトライフルを構える。

朔哉＆ロックオン
「「待たんかぃィィ！！」」

それを二人はツッコミを入れた。

朔哉
「お前、何ィィィィ！？奴の企てってアレかッ！？くららとフォルカのデートかァ！？」

葵
「デートじゃないわよ！認めないわよ、あんな奴とのデートなんて絶対に認めないわ！」

ロックオン
「やかましいわ！俺はお前がダンクーガノヴァのパイロットだなんて絶対に認めないわ！」

カレン
「私だってあんな奴とのデートだなんて絶対に認めないわ！」

ジョニー

「あなたは少し黙っていてください！！」

何故か一緒にきた紅月カレンをジョニーが黙らせる。

朔哉

「冗談じゃねぇ、こっちはせっかくの休日にわざわざ来てやったってのによぉ？来てみればアイツらのデート邪魔するだぁ？やってらんねえ、俺は帰るぜ」

ロックオン

「俺も帰らせてもらうぜ」

ジョニー

「僕も帰らせてもらいます」

葵

「待ちなさいよ。私が何時そんなこと頼んだのよ？私はだだ、あの女狐を抹殺したいだけよ」

朔哉＆ジョニー＆ロックオン

「「「もっと出来るか！！」」」

葵の言葉に三人はさらにツッコむ。

朔哉

「全く、カレンよぉ、このブラコン姉貴になんか言ってやれよ」

カレン

「誰がカレンよ。殺し屋紅蓮１３と呼びなさい」

そう言っていつの間にかカレンも何故か葵と同じくサングラスとアサルトライフルを持っていた。

ロックオン
「何やってんのお前……13って何？某どっかの殺し屋か？」

カレン
「不吉の象徴よ。葵さん私も手伝います。あんな奴に抜け駆けさせるのを黙って見過ごせないわ！」

葵
「ええ！行くわよカレン！！」

そう言って二人は遊園地に向かって走り出した。

ロックオン
「ヤベーな。アイツらマジでやりかねないぞ！おいアレルヤ、止めに行くぞ！」

そう言ってロックオンはちょうど暇していたソレスタルビーイングのマイスターの1人のアレルヤに言う。

アレルヤ？
「誰がアレルヤだぁ？俺は殺し屋ハレルヤ13だぁ！」

そう言ってハレルヤは葵達と同じくサングラスとアサルトライフルを持って走り出した。

ロックオン
「ちょ、おいいィィィ！！」

ハレルヤ
「面白そうだから行って来るぜぇ！」
そう言って遊園地に入っていったハレルヤを後を追う三人だった。
後半に続く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9717t/

第二次スーパーロボット大戦Ｚ　破界編！～紅き修羅神を操りし戦士～

2011年12月6日23時53分発行